

グローバル通信

2020.3 vol.52

Ryukoku University
GLOCAL TSUSHIN

早春の候、まだ寒さが残る日がありますが皆さまお元気でお過ごしでしょうか。

気がつけばもう春の季節です。今年度を締めくくり、また新たな一歩を踏み出すという方も多いのではないのでしょうか。

春は門出の季節です。多くの学生達は修士論文・課題研究の最終報告会に向けた準備を行なっています。これまでに修了された先輩方のように、地域公共人材総合研究プログラムでの学びが新たな活躍の場で活かされることを楽しみにしております。

また、春は始まりの季節でもあります。これから入学される方々との新たな学びの創出ができることを大変心待ちにしております。

さて、今回のグローバル通信では、勇退される青山先生のお言葉をはじめ、今年度の修士論文・課題研究題目の一覧、実践的科目の通年履修の振り返り、などをお伝えいたします。地域公共人材総合研究プログラムの取り組みや研究の内容を是非ご覧ください。

来年度の皆様のますますのご健勝を念じ申し上げます。

「みんなが住み続けたいと思えるまち」へ

持続可能な東近江市の実現に向けて

修士論文・課題研究を書き終えて

2019 年度修士論文・課題研究 題目一覧

青山先生 お疲れさまでした

実践的な科目の通年履修を終えて

講演会の感想

事務局インフォメーション

1
1
2
2
3
3
4
4



「みんなが住み続けたいと思えるまち」へ

上村 崇
(京田辺市長)

京田辺市は、東に木津川、西は生駒山系に連なる甘南備山に囲まれた豊かな自然のあるまちで、古くから交通の要衝として栄えてきました。

豊かな自然と高い交通利便性に加えて、先人達が進めてこられた安全・安心な暮らしの創造と数々の子育て支援施策によって、人口減少社会の日本において、今なお緩やかに人口が伸び続け、昨年 6 月には住民基本台帳上の人口が 7 万人を超えました。

しかしながら、確実に進む高齢化と生産年齢人口の減少傾向をみると、これからのまちづくりも、やがてくる人口減少を見据えたものでなければなりません。

そのような中で、今年は第 4 次総合計画がスタートする年にあたることから、これまで進めてきたまちづくりを継承し、まちへの誇りと愛着を育むとともに、参画と人のつながりによるまちづくりを加速させてまいります。

まちづくりの推進にあたっては、市役所組織の再編とともに、今まで以上に文化・スポーツ、子育て分野を充実させ、市民・大学・企業・関係団体の皆様とスクラムを組み、知恵とエネルギーを結集し、「ONE TEAM (ワンチーム)」で取り組んでまいります。

5 月には「ワールドマスタースゲームズ 2021 関西」の開催に先立ち、本市でハンドボールのプレイベントも開催されるほか、今年で 5 回目となる「ツアー・オブ・ジャパン京都ステージ」など、京田辺が舞台となる様々なスポーツを通じた地域の活性化にも積極的に取り組んでまいります。

さらに、令和 5 年度には新名神高速道路の全線開通、また将来には北陸新幹線の新駅設置という大きな発展要素があり、これらの開発インパクトを確実に、そして最大限に生かすことがまちの発展の鍵となります。

本市の目指す都市像である「緑豊かで健康な文化田園都市」の実現に向けて、「令和」という新たな時代の京田辺を、職員と一丸となって切り拓いてまいります。そのためにも今後とも貴学との連携を深め、地域社会に貢献できる人材育成に取り組んでまいりますので、引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

持続可能な東近江市の実現に向けて



内藤 正明

(公益財団法人 東近江三方よし基金 理事長)

いま全国で農山村の衰退が大きな課題となっている中で、滋賀県東近江市は、中世から惣村自治が根付き、古くから地域活動が非常に活発な地域です。また、全国で活躍し、あきないの精神「三方よし」をつちかてきた近江商人の発祥の地です。そのような地域で、地域課題の解決や地域資源を活用した地域活性化をめざす活動、コミュニティビジネスを支援するために設立したのが、「公益財団法人東近江三方よし基金」です。この基金は、「地域の食と農を再生する」「森里川湖のつながりの再生と活用」「子ども・若者の学びや仕事を支える」「生業・企業・ものづくりを支援する」など、地域の自然と暮らしを支える、地元根差した活動を、市民・事業者・行政が力を合わせて支える仕組みです。2016 年に設立した基金では、滋賀県で初めて SIB (ソーシャル・インパクト・ボンド) という、事業の成果に連動して報酬を支払う手法を導入し、2018 年度までに採択した 13 事業全てが成果目標を達成しました。SIB による出資という手法を通じて地域課題に共感し、当事者化する市民が増えるということは、持続可能な地域を実現する重要な社会的インパクトであると考えています。また当基金では、遺贈寄付を含め「志のある資源 (お金や不動産)」を次世代につなぐ仕組みづくりや、地域金融機関と連携し地域で資金を循環する仕組みづくりにも取り組んでいます。

さらに 2018 年に龍谷大学様と地域人材育成に係る協定を締結させて頂いたことから、地域課題をビジネスで解決していく社会的事業者やそれをサポートできる人材の育成に取り組んでいきたいと考えています。近江商人は、事業で得た収益の多くを次世代育成やベンチャーキャピタルに投資し、長い目で見た事業の継続と地域の持続を実現しました。それらの知恵は、現代の学校や金融にいかされています。

当基金では、事業の発展とともに、公益のためにも尽くした近江商人の「三方よし」の精神が大切であると考えています。その理念を継承し、地元根差した活動を地域で支える「現代版三方よし」の仕組みが、持続可能で豊かな社会づくりの一歩となり、農山村の再生につながるものと信じてこれからもチャレンジしていきます。

修士論文・課題研究を書き終えて



川畑 恵子 政策学研究科修士課程 1年 修士論文を書き終えて

講義や演習など様々な場面で、まさに「チーム政策」、学科全体でのご指導を実感した幸せな1年でした。なんとか論文を提出できたのは、先生方はじめ関係者の皆様の温かいご指導と励ましのおかげと感謝しています。

学生生活を通して地域や市民活動の現場で感じてきたモヤモヤをスッキリできればという淡い期待は簡単にはかなわずもなく、むしろ次々に課題が見つかり、今見えているものや視点は断片的で些細なもので、時間の経過や環境、価値により変化するものと知ることの連続でした。その繰り返しは、常に問いを持ち続けるためのトレーニングだった気がします。

修了は一つの通過点。いただいたご縁と学びを大切に、これから好奇心と仲良くつきあって行こうと思います。



樋口 育弘 政策学研究科修士課程 2年 修士論文を書き終えて

私は漠然と「SDGsを研究したい!」という気持ちで大学院に入学しました。入学当初は複数の学問分野で統合的に課題を解決するという政策学の特徴に戸惑い、講義のレジュメやレポートを作成するのに大変苦労しました。地域公共人材総合研究プログラムの様々な講義やワークショップを通して、「協働」や「連携」といったパートナーシップの仕組みに関心をもつようになりました。加えて、特別演習・論文指導で多種多彩な分野の先生方、院生の皆様と繰り返し意見を交換することにより、研究テーマが次第に明確になっていきました。

修士論文では、先行研究でわからないことをフィールド調査で明らかにするという研究手法を採りました。調査において、自分で現地へ足を運び、当事者の生の声を伺うという一次情報の正確性と重要性を体感することができました。今後は実務を通じて、常に地域の実情を理解し、日々変化し続ける社会課題の解決に取り組んでいきたいです。



岩島 伸二 経営学研究科修士課程 2年 課題研究を書き終えて

課題研究論文は「中小企業における親族外への事業承継」というテーマで自社の事業承継の実践を検証し、中規模事業者の親族外への事業承継の新たな「承継モデル」としての可能性を示唆する研究論文を執筆したものです。

特徴的なことは、中小企業の事業承継といえは経営者一人（社長）を選び、承継させるやり方が一般的であるが、筆者の場合は3名（社長・専務・常務）を選び、中小企業家同友会という外部組織を活用して、経営者としての自覚と責任感の醸成や自ら学ぶことの重要性を認識させ、自立する為の教育を実施し「チーム経営」で事業承継を行ったことを論文としてまとめました。論文を書き始めると悪戦苦闘の連続でした。ワードの操作方法に困り、論文が進まず大変苦労しました。

先輩に使い方を教えられながら、何とか完成させた次第です。ご指導をいただいた経営学部の細川教授や多くの先輩学友に支えられたこと、また野村総研の松田真一氏に、自社の行ったことの論理的整理のアドバイスをいただいたことを感謝してご報告とさせていただきます。

2019年度修士論文・課題研究 題目一覧

No.	氏 名	所属研究科	区 分	修士論文・課題研究 題目
1	植村 暢子	政策学研究科	修士論文	地域社会における民生委員の歴史の変遷と今日的変容
2	野口 裕加	政策学研究科	修士論文	「地域志向型 SIB」の意義と課題に関する考察
3	藤井 敦	政策学研究科	修士論文	障害者の「自立」と「労働」に関する一考察 ～70年代以降の実践史を中心に～
4	金森 祐樹	政策学研究科	修士論文	琵琶湖での水草有効活用の課題と可能性 ー中海、穴道湖との比較を通してー
5	原田麻也子	政策学研究科	修士論文	ブリュッセルの公共空間におけるテラス席等の私的利用に関する考察
6	川井 千敬	政策学研究科	修士論文	京都市における宿泊施設の立地動向とそれによる地域への影響分析
7	土海比呂志	政策学研究科	修士論文	地域エネルギーガバナンスの構成要素に関する一考察 ー鳥取県内の3つの事例を通してー
8	中田 光瑠	政策学研究科	修士論文	公民連携オガールプロジェクトがもたらす地域への効果と今後の展開についての考察
9	並羅 聡志	政策学研究科	修士論文	受動喫煙防止対策法制に対する憲法論的検討 ～経済活動における人格的価値の可能性～
10	樋口 育弘	政策学研究科	修士論文	SDGs達成に向けてのパートナーシップに関する研究 ー北海道下川町・京都府舞鶴市・大阪府富田林市の事例を比較してー
11	山川 勝也	政策学研究科	修士論文	プロセスアプローチによる子ども虐待予防のための行政制度の課題 ー日本とフィンランドの子育て世代支援制度の比較ー
12	馬 建	政策学研究科	修士論文	廃プラスチック削減に向けた政策の課題に関する研究 ー京都市と亀岡市を事例としてー
13	富田 知未	政策学研究科	課題研究	開発援助事業における評価の在り方についての一考察 ープロジェクト終了後の持続的成長を促す要因とはー
14	今西 伸雄	政策学研究科	修士論文	ベッドタウンから職住調和都市への転換に関する一考察 ー京都府城陽市を中心にしてー
15	川畑 恵子	政策学研究科	修士論文	大阪市内の地域活動協議会における新規事業の創出要因の考察
16	京藤 博行	政策学研究科	課題研究	京都市における中小印刷業者の今後の方向と自治体の産業政策
17	中野ともみ	政策学研究科	修士論文	社会課題に取り組む「担い手」の拡大はどのように起こるか ー「気づき」をうながし「実践」をすすめるものは何かー
18	中橋 晃季	政策学研究科	修士論文	障害福祉行政における情報提供のあり方
19	水野 光浩	政策学研究科	修士論文	新聞紙における「記事体広告」の社会的役割 ー全国紙滋賀県版での市民活動支援広告の事例からー
20	山元 達俊	政策学研究科	修士論文	LOIS型企業の育成による小規模農業の活性化に関する研究 ー滋賀県湖南市「みらい公園湖南プロジェクト」を事例に～
21	柴田美知子	法学研究科	修士論文	職場のパワハラ訴訟において被害者の心因的素因が損害賠償額に与える影響と過失相殺 ー被害者救済・パワハラ防止の観点より問題点を探るー
22	欧陽 金蓮	経営学研究科	課題研究	老舗と時代変遷について 京都の老舗を事例として
23	孟 好	経営学研究科	課題研究	グリーン・ツーリズムの展開と地域特性 日本の人的交流と地域活性化を中心に
24	岩島 伸二	経営学研究科	課題研究	中小企業における親族外への事業承継 経営理念を継承する経営陣の育成と開発を中心として

青山先生 お疲れさまでした



あっという間の5年間でした!!

政策学研究科 特任教授 青山 公三

私が龍谷大学政策学研究科の特任教員として着任したのが2015年でした。授業や演習が始まってみると龍谷大学の大学院には、たくさんの社会人の方々がいて、その方々と学部から上がってきた院生を交えての議論がとても楽しかった記憶があります。私はもともと大学の教員・研究者というよりは、30年余にわたる日米のシンクタンクの研究員としてのキャリアの方が長かったので、色々なことに好奇心を持ち、興味を持ち、関心を持ってやってきました。中でも好奇心は私の人生を支えた重要な要素でした。その好奇心をくすぐられたのが龍谷での様々な議論でした。

シンクタンクの仕事には通常クライアントがいます。クライアントは多様なリサーチニーズを持ち込んできます。その多様なリサーチニーズにどう応えていくかというところに好奇心が必要なのです。自分が好奇心を持っていないような仕事は、おそらく良い仕事はできていなかったと思います。面白いと思うからこそ自ら色々な情報・データを探し、その面白さを証明するという仕事が私の性分には合っていたのかもしれません。

大学の教員になって、研究も同じだと思いました。違うのはクライアントがいるわけではないので、自らがクライアントとなり、仕事を作っていかなければなりません。自分がクライアントになるには、社会の様々な動き、状況に好奇心を持ち、何が今社会に求められているかを察知しなければなりません。社会がクライアントなのかもしれません。

龍谷大学に来て楽しかったのは、院生の皆さんや色々な分野の先生方が、色々なニーズを持ち込んで、ディスカッションし、イベントを行い、研究にまとめていくというプロセスが多様に用意されていたことだと思います。5年という期間はそれを十分楽しむにはちょっと短すぎた感がありましたが、それでもこういう機会が持てたことは、私にとって、大いに好奇心がくすぐられた本当に良い5年間でした。有難うございました。

実践的な科目の通年履修を終えて

水野 光浩 政策学研究科修士課程 1年

地域公共人材実践演習(キャブストーン・プログラム)

本講義は、龍谷大学大学院生・科目等履修生・京都中小企業家同友会伏見支部の会員がそれぞれ参加した講義で、「キャブストーンとは、ピラミッドの頂上にある四角錐の石のことで、大学、大学院、あるいは社会人として様々な学びをしてきた総仕上げとして実施するもの」とされている。本年度はSDGsを基に地域に関わることを重点とする方向性で活動を進めることとし、2つの班に分かれ取り組んだ。

1つ目の班は、京都中小企業家同友会会員へのヒアリングを実施することで得た知見から、アクションプランの提言を行うことをめざした。2つ目の班は、商店街とのコラボレーションにより啓発イベントの実施に取り組む班であり、竜馬通り商店街でのイベントで子ども達をターゲットとしたSDGsの啓発活動を実施した。

そして2月27日に京都中小企業家同友会に対して報告発表を行った。与えられた課題に取り組むのではなく、自分たちで考え行動して何かを成し遂げるという事で、自分の中にある何かが進化してきたのではないかな。



中橋 晃季 政策学研究科修士課程 1年

フィールドワーク特別研究

「フィールドワーク特別研究」は、社会人院生向けの授業であり、それぞれの職場の業務から設定される研究課題に1年かけて取り組むという授業です。今年度は、4月に各自の研究課題を設定し、課題に取り組み、9月の中間報告を経て、1月に最終報告を行いました。

私は市役所に勤めているのですが、近年、各種申請書類の電子化について検討することを求められているため、所属する係の事務で用いる申請書類の電子化について検討することを課題に設定しました。具体的な取り組みとしては、「申請書類電子化検討シート」を作成し、事務ごとに各申請書類の制定権限や添付書類の内容等を確認し、電子化「可能」であるのか。「不可」であるのか「研究継続」とするのか検討を行いました。

授業の一環とはいえ、今回、職場の課題を追求することができたのは大変有意義なことでした。また、他の受講生が、それぞれの職場等の課題に取り組んだ結果を聞かせていただくと、それぞれとても興味深い内容に取り組まれており、そうした報告を聞かせていただくだけでも有意義なものでした。



地域リーダーシップ研究講演会（2019年11月30日実施）

講師：鈴木 淳之 氏（株式会社白川まちづくり会社取締役副社長）

テーマ：地域の社会的課題を解決する CMO 白川まちづくり会社の挑戦

政策学研究科修士課程 1 年 今西 仲雄



鈴木氏は、京都の東山区に位置する古川町商店街のリノベーションや、地域が丸となって設立された「白川まちづくり会社」の経緯、地域コミュニティを巻き込んだまちづくり、ワークショップ、インスタ映えするランタン祭りなど工夫された様々な催しについて淡々・飄々と語られた。

その商店街再生の話も興味深いものであったが、その後の参加者の質疑が核心を突いたものであったため、控え目に話されていた鈴木氏の活動の偉大さ、リーダーシップ性を大いに引き出すことになった。質問力の重要性を感じた次第である。

また、自然に任せればコンビニも出店していただろうけれど、そこは静かな熱い信念で排除され、商店街のトータルなコンセプト、あるべき姿を守り通されたこと、そしてその信念をギラギラさせないところがスゴさなのだろう。懐かしい昭和レトロな古川町商店街。変わらないことを簡単に考えていたように思う。そのためには確固とした信念、先見性、知恵とエネルギーがいることをつくづく思う。

先進的地域政策研究講演会（2020年1月25日実施）

講演：龍谷大学 ATA-net 研究センター キック・オフ・シンポジウム（犯罪学研究センター共催）

テーマ：メディアスクラムとソーシャル・インクルージョン ～当事者の位相、支援者の位相、協働の位相～

政策学研究科修士課程 1 年 正岡 祥英

社会の多様化や複雑化が漸次進行している現代では、異なる政策主体たちによる社会との関わりが重要となります。そのため、社会に関心を示し、一人一人が市民や主権者として他者と熟議を行い、合意形成のプロセスに関与する熟議民主主義に依るシステムの存在が一層求められます。

今回行われた課題共有型円卓会議は、熟議民主主義に依るシステムの一種となり得ます。この手法は、参加者全員が議論を行う当事者の一人となり、熟議を通じて問題に対する考えの練度を高めることで、市民や主権者としての質を高められるものとなっています。それ故、この手法は今回のテーマとも共通した「人々の対等性の保障」という課題を抱え、これをどのようにして担保するか模索し続けることが今後必要となります。

昨今、「民主主義の赤字」とも指摘される現代だからこそ、賛成人数ではなく議論の質に着目する課題共有型円卓会議も含めた熟議民主主義が必要ではないでしょうか。

先進的地域政策研究講演会（2020年1月30日実施）



講師：三木 竜介 氏（神戸市保健福祉局健康部健康政策課／健康創造担当課長 行政医師）

テーマ：神戸市健康アプリ MY CONDITION KOBE の健康政策

政策学研究科修士課程 1 年 西井 勇貴

講演者の三木竜介さんは医師であり、神戸市で MY CONDITION KOBE の開発に携わっておられます。

MY CONDITION KOBE とは携帯で自分の健康状態を確認できるアプリであります。神戸市では神戸に住めば健康になれるということを目標にし、この健康アプリを開発し、神戸市民や神戸で働く人であれば誰でも利用できるものです。自身の健康診断の結果や健康状態をこのアプリ 1 つで確認、管理することができます。また続けやすくするために、お得感のある特典と交換可能なポイントを付けるなどの工夫がされています。生活に余裕があり健康に関心がある層だけでなく、普段の生活に追われていて健康に気を使えていない層もこの健康ポイントを活用することで取り込むことができ、健康格差が無くなることが期待できるのではと感じました。

全ての人に対して平等にサービスを届けるという行政にとって一番大切な事が出来ていると感じました。私も 4 月から行政の現場で働くので今回学んだことを活かしていきます。

事務局インフォメーション

●学位記授与式

日時：2020年3月14日（土）10:30～
場所：龍谷大学深草学舎顕真館

●入学式

日時：2020年4月1日（水）14:30～
場所：龍谷大学深草学舎体育館

地域公共人材総合研究プログラム ニュースレター『グローバル通信』通巻 52 号 2020 年 3 月

発行／龍谷大学大学院 地域公共人材総合研究プログラム
連絡先／政策学部教務課
TEL：075-645-2285 FAX：075-645-2101

H P／http://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/
編集／小松右詩、田中優大
編集補助／神野華奈子、太田由記子、竹之内正臣
監修／グローバル通信編集委員会
印刷／株式会社 田中プリント